

新潟職能短大通信

私の私のお国自慢

(熊本城その二)



私のふるさとにある熊本城を紹介したいと思えます。熊本城はご存じのように虎退治の名人として知られる加藤清正が、関ヶ原の翌年から七年の歳月をかけて築きあげました。城の完成を祝い、

それまで「隈本」であった地名を「熊本」に改めました。城郭の広さは約九十八万平方メートル、周囲五・三kmもあり、その中に大小天守の他、櫓四十九、櫓門十八、城門が二十九もあります。一大名の城としては日本一とも云われています。清正は籠城に備え、建物の土壁に干瓢(かんぴょう)を塗り込め、畳床には食用になる里芋茎を用い、



大小天守閣

城内には百二十箇所の井戸を掘りました。

死期が迫った清正は、自分が植えた銀杏を見て、「この銀杏の樹が天守閣と同じ高さになったときに何か異変が起こるのである」と予言しました。それは奇しくも明治十年に起きた西南の役を指していたようです。この城に立てこもった四千人の政府軍は五十日間も籠城に持ちこたえることができませんでした。数百年の時を経て清正の優れた城づくりが証明されました。



復元された本丸御殿大広間

新潟職能能力開発短期大学校 能力開発部長

坂本龍彦

「大倉翁と新発田」(二)

川瀬勝一郎

大倉喜八郎の(幼名・鶴吉)誕生から出府まで

大倉翁(大倉喜八郎)

は幕末の天保八(1837)年、越後・新発田城下の下町(現・大手町1)に生まれた。翁は明治四十四(1911)年に刊行の菊池暁汀編「致富の鍵」で、「私の口で言うのはおかしいが私の家と言うのは越後新発田の町人だった。私の祖父に当たる人は頼山陽に交わりもあり書家の菱湖さんたちも私の家に永らく食客していたこともある。私の家の商売は質屋で兄弟五人の中私は四番目二人の兄と一人の姉とあり私の下は妹である……」と述べている。

鶴吉(大倉翁)が安政元(1854)年十七歳で江戸へ出るまで過ごした新発田城下は、当時領内の災害や病虫害などによる大凶作で米価が高騰、物価も上昇し、更に伝染病の蔓延などにより不安の多い時代だった。鶴吉が誕生した翌年

の天保九(1838)年、新発田藩では十代藩主直諒が隠居、十一代直漣が相続している。藩是は尊王開国で、隠居した十代藩主直諒は健康と称し「報国説」を現している。藩では儉約を勧め経済の建直しをはかると共に、

学問、武芸を奨励し士気の高揚と精神的引締めをはかっている。また武器の手当を勧め、西洋流砲術を導入し、銃砲・大砲の製作や訓練、技術的研究なども行っている。

鶴吉(大倉翁)は社会情勢の厳しい中、七歳で石川治右衛門につき四書五経の素読をうけ、十一歳で積善堂(丹羽伯弘)の門に入り漢学を学んだ。また十三歳で太極園柱から狂歌を学んでいく。大変な努力家で成績も抜群であった。



丹羽伯弘私塾跡

院羽先生積善堂址

大正九年三月二十八日建

現・新発田市西園町3 県立西新発田高校校庭の一隅